視察レポート

長崎の2つの新しい平和学習プログラム

（公財）日本修学旅行協会　理事長　竹内　秀一

長崎といえば、広島、沖縄と並ぶ平和学習の最適地。コロナ禍にあっても修学旅行で多くの学校が訪れている。その長崎市で、「探究的な学習」に対応した新しい平和学習のプログラム「長崎SDGs平和ワークショップ」がスタートした。

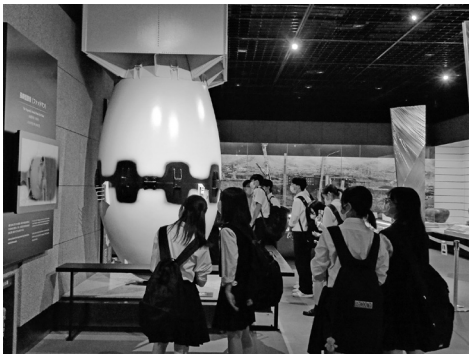
先日、新潟県立糸魚川（いといがわ）高等学校の2年生が、修学旅行の初日の活動としてこのワークショップを体験した。糸魚川高校は、「糸魚川学（I Quest）」と名付けられた探究活動を展開している探究学習の先進校で、文部科学省からは糸魚川市との地域協働推進校に認定されている。

修学旅行で「長崎SDGs平和ワークショップ」を本格的に実施するのは糸魚川高校が初めてということなので、（一社）長崎国際観光コンベンション協会の協力を得てこれを視察させていただいた。ここでは、そのプログラムの内容と生徒たちの様子、そして新たに開発された長崎の学習ツールについて紹介させていただきたい。

現地学習は原爆資料館の見学から

糸魚川高校の生徒たちは、学校での事前学習のなかで、被爆された方による講話をすでに視聴していて、そのうえでこのプログラムに臨んでいる。

長崎での平和学習は、長崎原爆資料館の見学から始まった。常設展示室では、「原子野と化した長崎の街」の様子を伝える被災した大型の実物資料―折れ曲がった製鋼所の鉄骨アングルや火の見やぐらなど―、また焼け焦げた天使の像や浦上天主堂の側壁（再現模型）などを多くの生徒が食い入るように見ていた。やはり実物資料のインパクトは大きい。投下された長崎型原爆の模型は、その大きさとそれ一発で7万4000人もの人々の命を一瞬にして奪ったという事実とを比べ、皆一様に驚きの表情を浮かべていた。



長崎型原爆模型の前で

熱線による物的・人的被害を物語る数々の資料や写真、被爆された方々が描いた当時の状況を表わす絵など、それらの一つ一つを熱心に見学している生徒たちの様子も印象深かった。

館内は、各自の自由見学だったが、1時間弱の時間では足りないと感じた生徒がほとんどだったのではないだろうか。事前学習で聴いた講話と原子爆弾が引き起こした惨状とが重なり合うことで、生徒たちは、戦争の恐ろしさ・平和の尊さを一層深く感じたことと思う。

平和ガイドとめぐる被爆遺構

資料館の見学を終えた後、平和ガイドの案内で被爆遺構をめぐる。8人ほどで構成されたグループが全部で13あり、それぞれに一人の平和ガイドがついた。原爆落下中心地では「原爆落下中心地」の碑や被爆した旧浦上天主堂の遺構などを見学、松山町防空壕群を見ながら平和祈念像のある平和公園に向かう。主なスポットで平和ガイドからの説明があった。基本的なところはガイド全員がしっかりと押さえながらも、それぞれに工夫が加えられている。各グループの生徒たちが、ガイドと積極的に交流している様子も見られた。

被爆直後の街の写真を前に

平和ガイドとめぐる被爆遺構

実際の遺構や碑、モニュメントなどをガイドの説明を聴きながら見学することで、講話や資料館の展示を通して学んだことがより現実味を帯びてくる。夕刻にさしかかる時間帯で、生徒たちも疲れが出てくるころだが、平和ガイドの説明にはそれぞれが聴き入っていた。

「学び」を定着させるワークショップ

ワークショップは、ホテルに入り、夕食を摂ったあとに設定されていた。被爆遺構めぐりのときと同じグループの中に、ファシリテーターが一人ずつ入ってグループワークを進めていく。ファシリテーターを務めるのは、研修を積んだ平和ガイドをはじめとする地元の方々だ。

オリエンテーションでは、プログラムの内容が説明され、併せて長崎市の学校などで取り組まれている平和推進の活動の現状や課題などが紹介された。ついで、グループワークの流れが示され、「平和推進のために何をする?」、「そのために自分は何をする?」といった課題があげられた。

グループワークでは、オリエンテーションであげられた2つの課題についてディスカッションし、グループごとに取り組むテーマを決め、さらに各自のアクションプランを考えていく。自分の意見はその都度付箋に書いて模造紙に貼っていき、それらをグルーピングして整理する。オリエンテーションで、他者の意見を否定しないこと、必ず全員が意見を述べることが約束されていたが、どのグループでも活発に意見が出されていて、楽しそうに議論をしている様子が印象的だった。

グループで決められたテーマは、「核兵器を無くし、戦争のない世界を作るには」、「戦争の記憶を風化させないために」、「戦争を無くすために私たちができること」といったもの。そのテーマのもとで各自が考えたアクションプランをグループごとにまとめる。最後に全員に向けて発表してその内容を共有し、各自の振り返りの時間とした。グループワークはおよそ75分間、ワークショップ全体では90分間を標準としたプログラムになっている。

ワークショップの様子（2枚とも）

ワークショップが円滑に進められたのは、被爆体験者による講話、原爆資料館の見学、平和ガイドの案内による被爆遺構めぐり、という立体的な「一連の学び」が、生徒たちの課題意識を高めたことによるものだと思われる。また逆に、このワークショップを体験することによって、生徒たちはそれまでの「一連の学び」の成果を、自分の中にしっかりと定着させることができたにちがいない。そして、生徒たちの「戦争と平和」についての思いは、この「学び」の経験が活かされることで、きっと、これまでよりも一段と深化したものとなるはずだ。

ワークショップでの発表

「長崎SDGs平和ワークショップ」は、新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」、さらに「探究的な学習」に繋がる画期的なプログラムだと考える。長崎で、平和学習をメインテーマとした教育旅行を実施するのなら、このプログラムを旅程に組み込むことを強くおすすめしたい。

事前・事後学習にも使えるARアプリ

「一人一台の端末」という学校の動きに対応して、新たに「長崎平和ARアプリ」が開発された。このアプリには、被爆された方々の動画や現地でしか得られない情報が多く収録されていて、大きな学習効果が期待できそうだ。また、長崎の街の3Dマップ、被爆遺構や関連スポットの古写真といったコンテンツは事前学習に、また活動中に撮った写真などと併せて事後学習にも活用できる。

アプリの利用料は、生徒1人につき300円と比較的安価に設定されているので、教育旅行での探究学習のツールとして使いやすいのではないだろうか。

【問い合せ先】
（一社）長崎国際観光コンベンション協会　事業部　まち歩き課
長崎県長崎市出島町1―1
出島ワーフ2階
TEL：095―816―0809
e-mail：heiwa-guide@nagasaki-visit.com
URL：http//syugaku.at-nagasaki.jp